



一般社団法人日本癌治療学会 がんnavi通信



認定がん医療ネットワークナビゲーター実地見学のこれから～学びを地域活動につなげるために～

がん医療ネットワークナビゲーター制度検討ワーキンググループ 委員長 市川 大輔

日本癌治療学会認定がん医療ネットワークナビゲーター制度は、地域において、がん患者・家族を適切ながん医療や相談支援につなぐ人材を育成することを目的として発足し、10年以上が経過しました。その中で、シニアナビゲーターの認定における実地見学は、eラーニングで得た知識を実際のがん医療や相談支援の現場で確認し、地域での活動につなげていくための重要な機会として位置づけられてきました。

一方で、現在、この実地見学の実施が制度上の大きな課題となっています。新型コロナウイルス感染症の流行以降、外部からの見学者の受け入れに慎重な医療機関が増えたことに加えて、施設によっては個人情報管理の観点から受け入れに消極的な場合もあります。また、受入施設にとって、見学者を受け入れ、指導することには一定の人的・時間的負担が伴いますが、現状では各施設や指導者をはじめとする関係職員のご理解とご厚意に支えられている部分が大いなのが実情です。さらに、施設の責任者や担当者の交代などによって、従来は可能であった実地見学の受け入れが難しくなることもあります。このため、見学を希望しても受け入れ施設がなかなか決まらず、実地見学がシニアナビゲーター認定への一つのハードルとなる場合が生じています。

だからといって、実地見学そのものをなくしてしまうことが望ましいとは考えておりません。実際に見学を経験されたシニアナビゲーターの方々からは、がん診療や相談支援の現場を直接見て、そこで働く医療者・相談員と話すことによって得られた経験は何物にも代えがたい、という声をうかがっています。カンサーボードや緩和ケア、がん相談支援センターでの実際の相談事例など、それぞれの現場で患者・家族がどのように支えられているのかを肌で感じることは、ナビゲーターとして活動していくうえで大きな意味を持つと考えています。そこで現在、がん診療連携・認定ネットワークナビゲーター委員会、ならびにその下部組織であるがん医療ネットワークナビゲーター制度検討ワーキンググループでは、実地見学を原則としながらも、それだけに限定しない、より柔軟な研修のあり方について検討を進めています。その一案として、カンサーボードや緩和ケアチームの活動、相談支援の実例などについて、動画等を用いて学習できる仕組みを整備し、相談症例についてもバーチャルな症例を活用することなどを検討しています。我々が目指すところは、動画視聴によって、単に「現地に行かなくても資格を取得できる仕組み」をつくることではありません。実地見学で本来得るべき学びを、様々な制約や限られた受け入れ施設の中で、将来のシニアナビゲーターの方々に可能な限り実感していただける研修制度を確立することです。しかしながら、ナビゲーターの役割は、資格を取得すること自体にあるのではなく、地域に戻り、患者・家族に必要な医療や支援につなぐことにあります。そのためには、地域のがん診療連携拠点病院やがん相談支援センターとの連携が欠かせません。

シニアナビゲーターを志す方々が、仮に動画視聴やバーチャル症例を活用して研修を行う場合にも、それだけで完結させるのではなく、症例レポートなどをもとに、学会が主導しながら地域のがん相談支援センターの担当者とWeb上で意見交換を行う場を提供したり、地域で活動する他の認定ナビゲーターの方々と情報交換できる体制を構築することも一つの方法であると考えています。学会が両者をつなぎ、研修をきっかけとしてお互いの「顔が見える関係」をつくることができれば、そのつながりは認定後の地域活動にも生かされると考えています。

本年度に実施したアンケートからも、制度そのものの認知は徐々に進んでいる一方で、地域における実際の連携はまだ十分とはいえないことが示されています。「制度を知っている」ことから一歩進んで、「誰とつながればよいのか」「地域でどのように活動すればよいのか」が見える制度にしていくことが、これからの重要な課題と考えています。実地見学をめぐる現在の課題は、単に認定要件を緩和するか否かという問題ではありません。対面だからこそ得られる経験を大切にしながら、地域や施設によって研修機会に大きな差が生じない仕組みをつくり、さらにその学びを認定後の地域活動へとつなげていく、そのような対面とオンラインそれぞれの長所を生かした新しい実地見学のあり方を、皆様とともに考えていきたいと思ひます。

がん医療ネットワークナビゲーター薬剤師ナビワーキンググループの活動と今後

がん医療ネットワークナビゲーター薬剤師ナビワーキンググループ 委員長 野村 久祥

はじめに

日本全国には6万を超える保険薬局があり、街のあらゆる場所に薬局が点在しています。近年、「かかりつけ薬局」を持つ患者も増加し、患者さんの人生に寄り添う存在として薬局の重要性はますます高まっています。そこに着目し、保険薬局に「がん医療ネットワークナビゲーター（がんナビ）」を取得する薬剤師がいることで、もともと構築されているがん患者さんとの関係性を活用し、よりスムーズにがん相談支援センターへとつなげることができると考え、源川 良一先生が、「がん医療ネットワークナビゲーター薬剤師ナビ（以下、薬剤師ナビ）ワーキンググループ」を発足し、現在に至っています。2024年に前薬剤師ナビWG長から引き継ぎ、第2期薬剤師ナビWGが活動を開始しています。今回、がんNavi通信をご覧の皆様へ、薬剤師ナビWGの活動と今後を報告します。

これまでの薬剤師ナビの活動とこれから

薬剤師ナビWGは、認定制度の理念を実臨床の現場で具現化し、その価値を社会に広く届けることを目標に活動しています。現在、がん医療ネットワークナビゲーターは全国で330名が認定されており、前ワーキンググループ長の尽力もあって、職種別では薬剤師が131名と最多を占めています。しかしながら、認定取得後にナビゲーターとして十分に力を発揮している薬剤師は決して多いとは言えず、その潜在力が十分に活かされていないのが現状です。この課題を踏まえ、私たちはまず「薬剤師ナビ」の横のつながりを全国的に構築することが急務と考え、ワーキンググループとしての活動を本格的に開始しました。具体的には、保険薬局薬剤師が多く参加する薬学系学術集会において企業ブースを出展し、薬剤師ナビWGの活動やビジョンを発信するとともに、ブースを訪れた会員との対話を通じて、現場で抱える悩みやニーズを共有してきました。また、これまで薬剤師ナビWGの存在を知らなかった保険薬局薬剤師に対しても、がん患者が十分にがん相談支援センターへつながっていない現状を丁寧に伝え、「ともに地域のがん医療を支える仲間」として参画を呼びかけています。さらに、薬剤師関連学会のシンポジウムに登壇し、日本のがん医療が抱える構造的な課題や、ナビゲーター薬剤師がどのように患者・家族に寄り添い、地域のネットワークを編んでいるのかを、具体的な実践例を通じて発信している。2024年以降の主な取り組みについては表1に示すとおりであり、教育・啓発・ネットワークを三本柱として歩みを進めています。

時期	学会大会名	活動内容
2024年 10月	日本薬剤師会年会（大宮）	展示ブースの設置 アンケート実施
2025年 3月	日本臨床腫瘍薬学会学術大会 2025（神戸）	シンポジウム： 薬剤師が紡ぐ地域がん医療 ～誰一人取り残さない薬剤師の患者支援を目指して～ 「保険薬局の取り組み～患者さんに寄り添い、繋げる地域のハブとしての役割～」
2025年 6月	日本プライマリ・ケア連合学会学術大会（札幌）	オンデマンド教育講演： 「がん患者支援の最前線！つなぐコミュニケーションを学ぶ～がんナビの事例から多職種連携の秘訣を探る～」
2025年 10月	日本薬剤師会年会（京都）	展示ブースの設置（写真1） アンケート実施
2026年 3月	日本臨床腫瘍薬学会学術大会 2026（博多）	シンポジウム： がん患者さんに寄り添う時に本当の意図に気づいていますか ～思いを紡ぐ糸を途切れさせないための服薬指導～
2026年 10月	日本薬剤師会年会（新潟）	学会共催ワークショップ1 地域薬剤師のための「がんと向き合う」第一歩 ～「何を話せばいい？」を「支える力」に変える処方箋～

表1. 薬剤師ナビWGの学会活動



2025年日本薬剤師会年会
navigiブース



図1. YouTubeへの出演

加えて、情報発信の裾野を広げるべく、SNSも積極的に活用しています。「がんナビゲーター」を深掘りしてみた【前編】1)「がんナビゲーターは薬局でどんな活躍をしている？【後編】2)とインフルエンサーのYouTubeチャンネルに出演し、一般市民や医療従事者に向けてナビゲーターの役割と可能性を分かりやすく伝えてきました（図1）。さらに、岩月進先生（日本薬剤師会会長）をはじめ、本田 あきこ氏・神谷 政幸氏衆議院議員など関係各位への表敬訪問を重ね、薬剤師ナビゲーターの活動を国レベルの議論にも位置づけていくことを視野に入れながら、制度の一層の認知と普及に向けた継続的な働きかけを行っています。

これまで日本では、「がん相談支援センター」を中心に、がん専門相談員の育成や体制づくりが進められてきました。しかし実際には、相談支援の場があるにもかかわらず、患者さんやご家族に十分活用されていないという現実があります。第Ⅳ期がん対策推進基本計画でも、「がんとの共生」の項目の中で、拠点病院と民間団体やピア・サポーターとの連携、地域にあるさまざまな人的リソースを活かした相談支援の充実が、今後の課題として挙げられています。こうした流れの中で、「がんナビ」の役割はますます重要になってきています。これまでもお伝えしてきたように、薬剤師ナビは、患者さんやご家族をがん相談支援センターへとつなぐ「ハブ」としての役割を担っています。一方で、薬剤師ナビゲーターとの関わりが、相談される方にどのような影響を与えているのかについては、まだ十分に明らかにされていません。そこで今後、薬剤師ナビWGでは、薬剤師ナビゲーターの活動状況について調査を行い、学術的な観点から「がんナビの有用性」を明らかにしていきたいと考えています。

最後に

薬剤師ナビWGのこれまでの歩みは、認定制度を現場に根付かせ、その価値を社会に示していくための、地道な積み重ねでした。全国330名のナビゲーターのうち131名を薬剤師が占めているという数字は、保険薬局という身近な場が、がん医療との新たな接点になり得ることを示すものだと考えています。一方で、認定を取得した薬剤師の多くが、その力を十分に発揮できていないのも事実です。学会集会でのブース出展やシンポジウムでの登壇、SNSでの発信、関係各位への表敬訪問といった取り組みは、こうした状況を一つひとつ変えていくための試みです。こうした活動を通じて見えてきたのは、薬剤師ナビの存在そのものよりも、その活動が実際にどのような効果をもたらしているのかを、きちんと言葉にして示していくことの大切さです。相談される方にとって、薬剤師ナビとの関わりがどのような意味を持つのか。第2期薬剤師ナビWGでは、この問いに向き合い、活動状況の調査を重ねながら、学術的な裏付けをもってその価値を明らかにしていきたいと考えています。保険薬局という、患者さんやご家族にとって最も身近な場所から、必要な支援へと橋渡しをしていく。このハブとしての役割を、これからも一歩ずつ育てていきたいと思います。

地域でがん医療を「つなぐ」薬剤師——がんナビゲーターを目指して

医療法人輝山会 輝山会記念病院 薬剤部
認定がん医療ネットワークナビゲーター 田中 康裕

私のがんナビゲーターの資格取得を目指したきっかけは、以前勤務していた病院での経験にあります。当時勤務していた病院は東京都内にあり、がん専門病院ではありませんでしたが、地域の中でがん薬物療法を行っていました。ある患者さんから、分子標的薬による治療を受けたいという相談を受けたことがありました。当時は分子標的薬が登場し始めた時期で、現在ほど多くの施設で利用できる状況ではありませんでした。そこで、地域のどの医療機関でその治療を受けられるのかを調べた経験が、がんナビゲーターを意識するきっかけとなりました。

この経験を通して、患者さんの中には、「今受けている治療以外にどのような選択肢があるのか知りたい」「専門的な治療を受けられる病院を知りたい」と考えている方が少なくないことに気づきました。また、インターネットやテレビなどから、さまざまながんに関する情報を得られる一方で、その情報が必ずしも正確とは限らず、何を信じればいいのか分からなくなっている患者さんもいました。そこで、患者さんが必要なときに、正しいがん医療の情報や地域の医療機関に関する情報を得られる場が必要なのではないかと考えるようになり、がんナビゲーターの資格取得を目指しました。

地域によって異なる「がん医療へのアクセス」

その後、勤務する地域が東京都から長野県に変わりました。東京では、周囲に大学病院やがん専門病院など、専門的ながん医療を提供する医療機関が数多くありました。患者さんがより専門的な治療を希望した場合にも、紹介先の選択肢は比較的多かったと思います。現在は、長野県飯田市内の病院に勤務しています。東京の病院に勤めていたときと比べると、当院でがん治療を受ける患者さんの数は多くなく、年齢層も高めです。そのためか、がんと診断されても、当院での治療を希望される方は多くいらっしゃいます。一方で、より専門的な治療を希望され、県外の専門病院への紹介を希望される方もいます。県内には、都道府県がん診療連携拠点病院

1施設、地域がん診療連携拠点病院8施設、地域がん診療病院 3 施設などがありますが、がんセンターのようながんに特化した専門病院はありません。そのため、そのような施設での治療を希望し、県外での治療を希望される方もいらっしゃいます。

一方、当院で治療を続ける方の中にも、「ほかにどのような治療があるのか知りたい」「専門的な治療を受けられる病院はどこなのか」といった情報を求めている方がいます。

そうした方に対して、その地域でどのようながん医療を受けられるのか、必要に応じてどこに相談すればよいのかといった情報を提供することは、がんナビとしての重要な役割の一つだと感じています。

そのため、現在は自分が勤務する地域だけでなく、近隣県を含めたがん診療の状況や、専門的な治療を受けられる医療機関についても、できるだけ把握するようにしています。

「つなぐ」ことができる薬剤師に

実際に、これまでも治療について悩んでいる患者さんに、がん相談支援センターを紹介したことがあります。ただ、実際にはがん相談支援センターを訪問された患者さんはまだ少数であり、地域の中で十分な「つながり」をつくりえているとは言えません。現在、長野県内のがんナビはまだ5名と聞いています。だからこそ、これから少しずつでも、ナビ同士や地域の医療機関、がん相談支援センターなどのつながり築き、患者さんが必要な支援につながるきっかけをつくっていければと考えています。そうした中で、私は、薬剤師はがんナビに適した職種の一つだと思っています。

薬剤師は、薬のことだけではなく、治療を受ける患者さんの不安や疑問を比較的身近なところで聞く機会があります。「この治療でいいのだろうか」「ほかに治療方法はないのか」「この薬は本当に大丈夫なのか」といった、医師には聞きにくかったり、診察室では聞きそびれてしまったりする疑問を聞くこともあります。

そうしたときに、薬剤師がすべての疑問に答えられる訳ではありませんが、必要な情報を探し、適切な医療者や相談窓口につなぐことも重要な役割だと思います。

「薬のことなら薬剤師」と思っていたくことに加えて、「がんについて困ったときにも相談できる薬剤師」と思っただけのようになれば、がんナビとしての役割をより果たせるのではないかと考えています。まだ地域での活動は始まったばかりですが、患者さんが必要な情報にたどり着き、自分が納得できる医療を選択できるように支援する。そのための「つなぎ役」として、これからも少しずつ活動の幅を広げていけたらと思っています。



がん相談支援センターや県内の拠点病院等の説明に利用しているパンフレット

薬剤師だからできる患者支援～地域におけるナビゲーターとしての役割～ ほし薬局 認定がん医療ネットワークシニアナビゲーター 星 利佳

「この言葉でよかったのかな」から始まりました

私が、がん医療ネットワークナビゲーターを目指したきっかけは、とてもシンプルです。がんの患者さんに、どのように接したらよいのか分からなかったからです。

「今の対応でよかったのかな」
「患者さんは、どんな気持ちで薬を受け取りに来ているのだろう」
「どんな言葉が心に刺さり、どんな言葉ならうれしいのだろう」
そんなことを考えながら、いつも恐る恐る言葉を選んでいました。今でも忘れられない出来事があります。がんの終末期にある患者さんのお宅へ訪問した時のことです。その患者さんから、帰り際にこう言われました。
「星さんは、一度も『がん』という言葉を使わなかったね。ありがとう」

私は、自分が患者さんの立場だったら、何度も「がん」と言われたくないだろうと想像し、なんとなくその言葉を使わないようにしていました。それが本当によい対応なのか、確信があったわけではありません。それでも、患者さんの言葉を聞いたとき、「この方にとっては、この接し方でよかったんだ」と思うことができ、とてもうれしかったことを覚えています。

一方で、どう支えればよいのか分からず、もやもやする場面もありました。

BSC（Best Supportive Care）となり、在宅療養を始めた後も、さらなる治療や抗がん薬治療の再開を望んでいる患者さんやご家族がいます。医療者から説明されている状況と、ご本人やご家族の気持ちが、まだ同じ場所になんか感じることもありました。

「本当は、どのような思いでいるのだろう」
「私は何を話し、どう寄り添えばよいのだろう」
そう思いながらも、具体的にどうすればよいのか分からずにいました。

そんなとき、たまたま参加した学会で、たまたま入ったシンポジウムを通じて、薬剤師のがん医療ネットワークナビゲーター、いわゆる「薬剤師ナビ」の存在を知りました。その後、先輩の薬剤師ナビからシニアナビゲーターの取得を勧めていただいたことが、学びを始める大きなきっかけになりました。

偶然が重なった出会いでしたが、私にとっては必然だったのかもしれない。

薬局は、患者さんの日常に近い場所

薬局には毎日、抗がん薬の処方箋を持った患者さんがいらっしゃいます。病院では緊張して聞けなかったことや、診察が終わってから気づいた疑問を、薬局で話してくださることもあります。薬局は、治療そのものだけでなく、治療を受けながら暮らす患者さんの日常に近い場所です。

コミュニケーションについて学び、患者さんが安心して話せる関係をつくることができれば、さまざまな相談を受けられるようになります。必要に応じて、がん相談支援センターや主治医、看護師などの専門職につなぐことも、ナビゲーターの大切な役割です。

さらに、私たちは薬剤師です。単に相談窓口を紹介するだけではなく、抗がん薬の服用方法や副作用、支持療法、ほかの薬との飲み合わせなど、薬に関する相談では専門性を発揮できます。

患者さんの話を聴くこと、薬の専門家として支えること。その両方ができるところに、薬剤師ナビの大きな可能性があると思っています。特に、乳がんや婦人科がんなど、女性特有のがんに関しては、女性同士だからこそ話しやすいこともあります。

下着のこと、脱毛のこと、ウィッグのこと、肌の変化やスキンケア、メイクのこと。どれも、患者さんにとっては毎日の生活に関わる大切な問題です。



